駒和紙

飛駒和紙の「いま・むかし」

江戸時代の明和5年(1768)に、飛騨国の上広瀬の人飛騨（現・郡馬県高山市）から伝わったといわれています。ピーク時の大正時代には紙漉き屋が30軒以上ありましたが、戦後の生活様式の変化などにより和紙の需要が減り、昭和40年に唯一残る今の飛駒和紙も一度その歴史が途絶えてしまいました。

平成6年にまちづくりの一環として、伝統ある飛駒和紙を復活させ後世に残そうと「飛駒和紙保存会」が結成されました。平成8年には、飛駒和紙の技術のあるとすべく「神明宮」が紙で屋根公園内に「飛駒和紙会館」を整備、同保存会の会員が、熟練となる3つの工程から紙漉きまでを行い、昔ながらの製造方法を引き継いでいます。

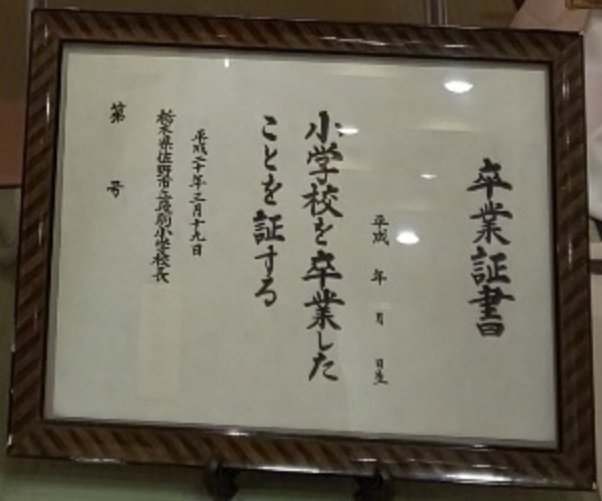
コルスンの無形文化遺産に「和紙」が登録されての際、飛駒和紙の技術や紙漉き体験の申し込みが殺到が、コロナ感染の情報などでも開かれるケースも増えています。

和紙ができるまで

1. 原料になる楮の木を刈り取り、2尺5寸（約75cm）に切る
2. 切りそろえた楮を束にして1時間半～2時間蒸し、皮をはがしやすくする
3. 皮を水に一晩浸漬してから、白皮で表皮を削り落とし、さらに2日ほど純水にする
4. 灰に1日浸し、竹の茎で煮たあと、更に水に1日浸し、ゴミなどをよく取り除く。2時間ほど静置打ち叩くことで、紙が漉ける状態に
5. トロロアオイの根から作るノリとよく混ぜ合わせ、桶に流し込み、一定の厚さになるまで繰り返し、濾いた紙の水をしぼりとる。乾かし、完成

◆飛駒和紙や和紙漉き体験についてのお問い合わせ

飛駒和紙保存会 〒509-0201 岐阜県飛騨市古川町2135（飛駒和紙会館内）
☎0577-73-2481 （土・日・祝日 平成30年～令和3年に休館中）



飛駒和紙（卒業証書）